

加賀家文書のアイヌ語資料と加賀伝蔵

深澤 美香

0. はじめに

本稿では、加賀家文書のアイヌ語資料とその研究史を概観し、執筆者である加賀伝蔵の生い立ちやそこから見た資料的特徴についてまとめる。1 節と 2 節では、加賀家文書のアイヌ語資料の概略と加賀家系譜ならびに伝蔵の生い立ちについて紹介する。3 節では、蝦夷通辞の社会的な立場とアイヌ語の運用について見ていく。4 節では、先行研究を参照しながら、加賀家文書のアイヌ語に関する方言的な位置づけについてごく簡単に論じる。そして、最後に、加賀家文書の中から「学校往来夷解書上」というテキストを取り上げ、その 5 種の写しにおいてアイヌ語の表現が徐々に洗練されていく様子を追うことで、各資料の成立時期について検討を試みることにする。

1. 加賀家文書のアイヌ語資料について

加賀家文書とは、蝦夷地の場所請負人の用人として働いていた秋田県（八峰町）八森の加賀家の人々が記録し、代々受け継がれてきた資料のことである。この文書の殆どは、ノツケ（現在の北海道別海町）などで蝦夷通辞として活躍した 3 代目加賀伝蔵が書き残したものとされている。日本語とアイヌ語の通訳や翻訳をするのが蝦夷通辞の仕事であることから、彼が書き残したアイヌ語は当時の北海道東部方言の記録として大変貴重なものと考えられている（詳しくは後の節で述べる）。

この文書は、1964 年に北海道史編集所編集員の永田富智氏が目録を作成し、それをもとに、1974 年、北海道立図書館がマイクロフィルムに収録。1980 年には、別海町教育委員会によってマイクロフィルムの複製が行われ、その後の 1998 年に、加賀家 7 代目の加賀実留男氏によって、別海町に加賀家文書の原資料が寄贈・寄託されることとなる。そして、その 2 年後の 2000 年 7 月、このような重要な資料を保管・研究・展示・公開するために、「加賀家文書館」が別海町郷土資料館の附属施設として誕生。現在はこの施設が加賀家文書研究の拠点となっている（別海町郷土資料館 2001a, 2012）。

前述のマイクロフィルム化された資料については、その殆ど全てが秋葉実氏の手によって翻刻され、翻刻活字版『加賀家文書』（別海町教育委員会 1989）と『北方史史料集成 第二巻』（秋葉 1989）に収められている。発行元は異なるが、内容は同一である。現代語訳では、戸田峰雄氏による『加賀家文書現代語訳版（全 5 巻）』（別海町教育委員会 2001b, 2002-2005）が既に刊行されている。しかし、公刊されたものはいずれもアイヌ語資料を一部の掲載に留めており、未だ多くの方が加賀家文書のアイヌ語資料にアクセスし難い状況となっている。

別海町へ寄託された文書資料 2,537 件中、「アイヌ語」に分類されている資料は 16 件（数字は別海町郷土資料館（2012））で、写真枚数にして 836 枚¹（表紙表裏込、見開き）を数える。その内容は、語彙集、地名解、アイヌの口承文芸、申渡、書簡、教訓書、和人の民間伝承、和人の口説節や和歌などをアイヌ語訳したもの等と多岐にわたっている。表 1 は、「アイヌ語」に分類されている 16 件の書誌情報をリスト化したものである。

No.	資料名	資料 番号	作成 者	年代：西暦	数 量	計測 値(cm)	写真 枚数
1	五倫名義解	21	伝蔵	（文久二年～慶応三年：1862-1867）	1冊	24×17	22
2	[和文・アイヌ語解]	26	伝蔵	（安政元年～：1854-）	1冊	24.8 ×17.8	36
3	[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①]	28	伝蔵	？	1冊	24.7 ×17.3	73
4	御手本	31	伝蔵	弘化年間～文久三年八月：1844-1863	1冊	25 ×17.5	132
5	[蝦夷地諸申渡]	32	？	？	1冊	24.5 ×17.3	35
6	蛮貊邦人言	33	？	天保四歳巳二月：1833	1冊	24.7 ×18.1	58
7	御通行蝦夷語	34	伝蔵	？	1冊	24.5 ×16.6	18
8	[シベツ名主宅蔵申口]	35	伝蔵	？	1冊	24.5 ×17	17
9	イロハ蝦夷言	38	？	文化年間	1冊	24.5 ×17.2	124
10	役土人申上和解書扣上	39	伝蔵	安政七申年閏三月：1860	1冊	24.5 ×17	22
11	学校往来夷解書上	40	伝蔵	（万延元年～：1860-）	1冊	14.5 ×19.5	13
12	天保十五年辰口六月来商売コラウユケトバ往来	48	伝蔵	慶応元年～慶応四年：1865-1868	1冊	14 ×19.5	52
13	蝦夷方言 藻汐草 [写]	49	伝蔵	？	1冊	14×19	138
14	土人イタッチャラルカ ン	95	？	？	1冊	24.5 ×17.4	79
15	[学校往来夷解書上]	371	伝蔵	？	1冊	29 ×18.5	10

¹ 実際に写真と原本とを照合していないため、誤差があるかもしれないこととお断りしておく。

16	[本家親父方へ書簡 外]	372	?	?	1冊	14.5 ×19.5	7
----	-----------------	-----	---	---	----	---------------	---

表1：加賀家文書のアイヌ語資料に関する書誌情報²

これら16件の作成者のうち5件は不明であるが、筆跡から判断する限り、全て伝蔵である可能性が高いと筆者は考えている。ただし、書簡の写しなどについて言えば、その多くが伝蔵に宛てられたものであるから、著者（＝差出人）は別にいることも勿論ある。

加賀家文書が初めて紹介されたのは、1931年9月10日の小樽新聞「北海道の研究資料古文献（序立小樽商業学校阿部勘之助）」であると言われているが、実はそのわずか3ヶ月前の6月1日に、深澤多市が『蝦夷往来』という雑誌に短報を載せている。『秋田叢書』の編纂に従事した彼は、「アイヌ文献及遺物を観るの記」（代田茂樹編 1931 [1972]）という題でそれを紹介した。彼の評価は高く、伝蔵を「此の人は長寿者であり且書及画を能くして又非凡の勉強家であったから其の記録の豊富なること蒐集の多量なることも当然である」と称え、加賀家文書について「まさに現代アイヌ研究者にとりて稀有の参考たるべきことは保証して差支えない所である」とも述べた。

歴史研究者などの間では以前から注目されてきた史料であつたらしく、その評価も高い。川上 (1991) の紹介には次のようにある。

同時代の記録としては、松浦武四郎の日記類は非常に詳しく、数度の調査によつているのでその場所場所における変化をみる場合など大変参考になる。しかし、この『加賀家文書』は伝蔵が現地に通辞として住んでいたという点では、何にも代えがたい貴重な記録類である。【中略】場所場所にこのような通辞はいたのであるが、これほど史料を残した通辞の例は、今のところ知られていない。その意味では、ネモロ場所周辺の文書というにとどまらず、蝦夷通辞の役割を考える上でも、このうえない史料と位置づけることができよう。 (pp. 53-54)

しかしながら、加賀家文書に限ったことではないが、近世のアイヌ語に関する言語学的な研究というのは全体数が少なく、これから益々発展させていくべき分野であると言える。加賀家文書のアイヌ語資料に焦点を当てた研究としては、

- ・加賀康三「「おきつ清三戀の夜嵐」について」（『蝦夷往来』第8号、1932）
- ・浅井亨「加賀屋文書の中のチャコルベ」（『北方文化研究』第6号、1972）
- ・佐藤知己「「申渡」のアイヌ語訳文に関する一考察」（『北海道立アイヌ民族研究センター研究紀要』第11号、2005）
- ・旭川アイヌ語研究会（編）『アイヌ語別海地方資料集成』（2011）

² 別海町郷土資料館（2012）を元に深澤が作成した。

- ・深澤美香「加賀家文書 翻刻・現代語訳 1 「菊のかんざしみだれ髪」(『ユーラシア言語文化論集』第 15 号、2014)
- ・深澤美香「加賀家文書「菊のかんざしみだれ髪」からの眺め：蝦夷通辞によるアイヌ語版「お吉清三」口説」(『口承文芸研究』第 36 号、近刊) (出版年順)

などが挙げられる。近世のアイヌ語資料はアイヌ語の知識が無ければもちろん読み解けないが、それだけでは不十分であり、また、日本語の母語干渉を強く受けたアイヌ語の記録であるから色々と不完全な記述もあって、ただひたすらに難解であるという印象が持たれてきた。金田一京助は加賀家文書を見に秋田まで足を運んだというが、研究はしていない。彼の時代はアイヌ語のインフォーマントから直接アイヌ語を聞き出し、それを記録・記述していくことが最優先であったというのもあるだろう。浅井享も、「チャコルベ」というアイヌの口承文芸に関する資料を取り上げたきりで、加賀家文書のアイヌ語研究はやめてしまった。最近では、田中聖子や佐々木利和、成田修一、佐藤知己諸氏が近世のアイヌ語資料について翻刻や分析を行ったものがあり、それらによってようやく土台が作られつつある。今後は、歴史や文化などの知識を持つ研究者らと共に近世のアイヌ語研究を進めていくことが、資料的価値を付与する上で重要な視点となっていくに違いない。

2. 加賀家系譜と 3 代目伝蔵の生い立ち

加賀家口伝では、加賀家の初代徳兵衛は加賀の国（現、石川県）の出身で、蝦夷地を目指して船出したが途中で時化に遭い、八森（現、秋田県八峰町八森）の海岸に漂着し、宮崎長八に助けられた。その後、宮崎長八の娘と結婚し、八森に居を構え再び蝦夷地を目指したということである。初代徳兵衛が加賀の国の出身なので、加賀姓を名乗ったと言われている。加賀家系譜については、表 2 にまとめる。

初代	徳兵衛	-1835	詳細は不明。
二代	鉄蔵	1792-1880	初代徳兵衛の長男。根室場所の支配人代、通辞などを務める。万延年間頃まで蝦夷地で務めたようであるが詳細は不明。
三代	伝蔵	1804-1874	徳兵衛の次男。加賀家文書の大部分を執筆。
四代	常蔵	1833-1914	伝蔵の長男。子モロ場所で勤務。
五代	恒吉	1859-1924	常蔵の次男。秋田県の八森で農業を営む。
六代	康三	1905-1985	恒吉の四男。秋田県で勤務。
七代	實留男	1930-	康三の長男。秋田県で勤務。

表 2：加賀家系譜³

³ 別海町郷土資料館（2001a, 2012）を元に深澤が作成した。

加賀伝蔵は、1804年に秋田の八森で生まれ、加賀家の三代目として蝦夷通辞などとして働き、加賀家文書の大部分を執筆した重要人物である。伝蔵については、会津藩士である一ノ瀬紀一郎が『北邊要話』に書き留めた有名な一節がある。

畑は全て番屋近辺に開き、和人の食料に充てている。中でも、野付の土地では野菜が多くとれる。この地は砂浜で地力はあまりよくないが、伝蔵という番人（伝蔵は秋田の生まれで、藤野喜兵衛のお抱え番人のひとりであり、蝦夷通辞である。この者がいつも人に語るには「我、蝦夷全州墾闢の祖とならん」と。一奇人なり。）が開墾に努め、近年は野付湾内の近辺から土を運び、畑を開いた⁴。

また、加賀家文書のなかには、伝蔵が自身の略歴を書いたものも残されている。

…私は文政元寅（1818）に釧路場所へ参るや否や会所の飯炊きを言い付けられて勤めて居た頃、その時はメンカクシ・ムンケケの兩人はおよそ26、7歳⁵の年頃でした。しかし、メンカクシはもっと年増にみえました。又、並小使のイラトカ、アイヌのコリタこの二人とも私の親しい者たちでした。中でもメンカクシ・ムンケケの二人は会所定詰の小使であったので、最初から3年間は和夷の差別もなく親しく日々を過ごしましたので、先ずアイヌ語の稽古の為、彼らなりの按配を聞き覚え、特にチャランケでの掛け合いことば等に一通り心に掛け、幾つかの言い伝えを聞きましたが、西別川並びにその上流のことで、釧路と根室のアイヌたちがごたごたしたことは一切聞きませんでした。

【中略】

尚又、飯炊きから蔵回り、帳場手伝いを兼ねたり、あるいは仙鳳趾番屋守、又は尺別止宿守になるまで彼是9か年かかり、それから吉蔵支配人の時に会所へ引き上げられ、仮帳役を勤めました。…

「五十二、[ニシベツ一件に付申上]（伝蔵略歴）」⁶

伝蔵が習ったとされるメンカクシやムンケケは釧路アイヌであったことから、彼はアイヌ語釧路方言を最初に習ったということになる。コリタはメンカクシの兄で同じく釧路アイヌ、イラトカも恐らくそうであったと思われる。伝蔵が釧路にいた頃は、兄の鉄蔵が根室場所で蝦夷通辞をしていたが、天保年間（1830-1843）には、伝蔵は根室場所へ移り、野付に住んで兄の代わりに蝦夷通辞として活躍することになる。シベツ（標津）が会津藩の領

⁴ 翻刻は秋葉（1989: 13）、現代語訳は別海町郷土資料館（2001b: 26-27）を参考にし、筆者が再び現代語訳化した。

⁵ 『加賀家文書現代語訳版第四巻』（別海町郷土資料館 2004: 267）の注によれば、この時メンカクシは11歳、ムンケケは15歳とある。

⁶ 別海町郷土資料館（2004: 267）より引用。

地になってからは、1860年に大通辞の称号が与えられ、1862年には支配人に取り立てられて、開拓使時代まで勤務した後、1874年八森で亡くなったということである。

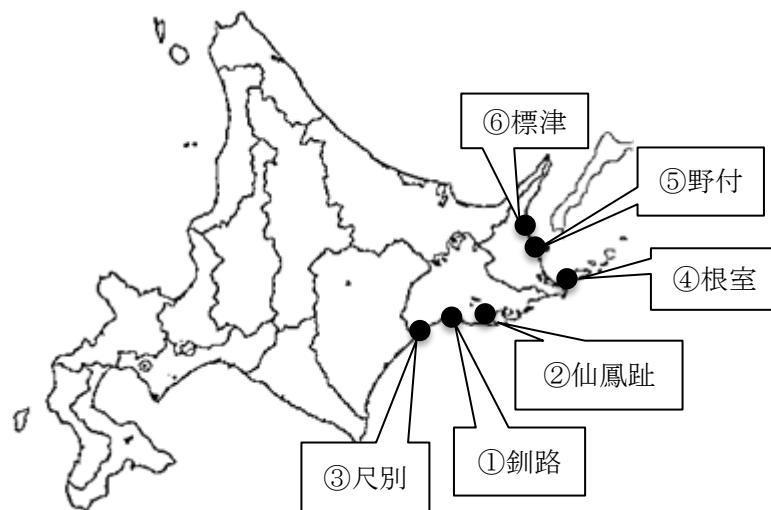


図1：伝蔵の勤務地（数字は順序を表す）

文化元年 (1804)	羽後八森で生まれる
文政元年 (1818)	蝦夷地へ下る (15 歳) 釧路場所で飯炊き・蔵回り・帳場手伝い 仙鳳趾番屋守 尺別止宿守
文政十年 (1827)	釧路場所会所仮帳役 (24 歳)
天保年間 (1830-1843)	根室場所に移る (27 歳) 野付に住まいし通辞役
万延元年 (1860)	標津場所大通辞 (57 歳)
文久二年 (1862)	標津場所支配人 (59 歳) 明治初期まで標津にて勤務
明治七年 (1874)	秋田県八森村で死去 (71 歳)

表3：伝蔵略歴⁷

表1と照らし合わせてみると、釧路場所時代のもので推定される資料1件（『イロハ蝦夷言』）を除いてほぼ全てが、野付や標津で勤務していた時代に書かれたものと考えられる。特に申渡の類は、野付で通辞として働いていた時の写しが多いようである。従って、資料の成立時期から推測すれば、加賀家文書のアイヌ語は、野付半島を中心とする近隣諸方言に影響を受けているということになるだろう。これについては後の節で再び検討する。

⁷ 別海町郷土資料館 (2012: 26) から体裁を一部変更して引用した。

3. 蝦夷通辞とアイヌ語運用

「蝦夷通辞」については、佐々木 (1989 [2013]) の「蝦夷通詞について」という論考が詳しいので、これに沿って見ていくことにする。尚、本稿では別海町郷土資料館 (2001a, 2012) に従い基本的には「蝦夷通辞」という用語を使用するが、これは佐々木が「蝦夷通詞」と書くものと同一である。史料中では「通事」や「訳人」等と書かれている場合もあり、佐々木はこれらの用語について「蝦夷地に関する史料中で「蝦夷通詞」の語が用いられる例は多くはなく、【中略】本来通訳を指す言葉であるからどれを用いても差し支えないが、上述のオランダ通詞や唐通詞などとの混乱を避けるためにも「蝦夷」の語を冠して用いるのが好ましい」(p. 226) と整理しており、筆者もこの立場に同意を示すものとする。

「蝦夷通辞」に関する研究は非常に少なく、未だその全貌は明らかとなっていないが、

- ①「蝦夷地にあつて、交易もしくは支配の目的で、アイヌとシャモとの間をアイヌ語を用いて通訳の業を行うもの」
(佐々木 1989 [2013]: 226)
- ②「北海道では武士階級の支配政策上アイヌが日本語を使用することを禁じていたので、奉公所や場所請負制の下での商人たちの雇った通訳が通辞と呼ばれていた」
(『北海道大百科事典下巻』1981: 115)⁸

ということで理解されてきた。ただし、一口に片付けられるような話ではなく、このほか佐々木が指摘していることを取り上げるなら、

- ③通辞にも上通辞、下通辞、通辞見習などの別があつたらしいこと⁹
- ④支配が通辞を兼ねる場合も間々あり、請負人が支配と通辞をも兼ねるといった

などという事実がある。④でいうところの「通辞」に関して、佐々木は「オムシャの際の申渡書朗読のような公式の場合のみの存在ではなかったろうか。日常の雑事には番人などが対応していたのであろう」(p. 233) とも述べており、いわゆる専門職ではない通辞の存在を指摘している。アイヌ語と日本語は異なる言語体系をもっており、和人の誰もが簡単にアイヌ語を習得できるのであれば、そもそも通辞という役職は必要ない。アイヌ語を使う必要性が高まればそれなりに運用できるようになったに違いないが、語学には得意・不得意というものも少なからずある。特に蝦夷通辞というのは、アイヌ語の習得レベルがステータスにもなっていたらうから、それを専門職として意識しているかどうかでアイヌ語

⁸ 見出しは「通辞」で、執筆担当者は浅井享である。

⁹ 佐々木 (1989 [2013]) は『寛政蝦夷乱取調日記』の記録から、「乙名との正式な交渉事には通辞(上通辞)があたり、下交渉には下通辞が担当していたものと思われる」、「しかし、この下通辞が「通辞見習」と同義であるとは考えられず、松前藩にとってこれらはあくまでも臨時の職であったとみえ……」という見解を述べている。

の運用能力は違ったかもしれない。佐々木の言うように「請負人の支配兼帯はともかく、通詞まで兼ねるとするのは、尋常ではない」(p. 233) というのは、確かにその通りなのであろう。

佐々木 (1989 [2013]) は、加賀家文書の「[宮内喜太右衛門書簡]」という資料を引用して、蝦夷通辞のアイヌ語に対する心構えについても検証している。この書簡は蝦夷通辞の心境や人間関係が見える資料でもあるので、佐々木が翻刻した『蛮貊邦人言』(資料番号 33) 所収の写しではなく、より年代が古い『イロハ蝦夷言』(資料番号 38)¹⁰ を底本とし、本稿でもう一度取り上げることにする。

蝦夷言の義、全定無之ものなり。

(アイヌ語は、総て定められているわけではないのである。)

天地草木魚虫、其名東西海浜山中、所々皆別々也。

(天地、草木、魚虫の名は東西、海浜、山中によって、それぞれ皆違いがある。)

勿論男女の言ニおみてをや。

(勿論、男女の言葉においては云うまでもなく、)

皆異也故ニ書記ニ不及。

(皆異なるが故に書き記すことができない。)

藻塩草ト云先生の秘書ニも誤り間々見得候。

(『藻塩草』という先生の秘籍にも誤りが時々見られる。)

必々自慢の心を発べからず。

(決して自慢しようと思わないように。)

時宜ニ応し手真似足真似之拙者、笑事なかれ。

(その時に応じて手真似足真似の私を笑ってはいけない。)

乍併、任望不能詞退ニ平言ニて申伸候。①

(しかしながら、望みに任せて言葉が不適切にならないよう日常語で述べます。)

第一、申渡は大切之儀故、

(第一、「申渡」は大切なことなので、)

制札表之通諸人之見得安如くいろは書ニて、

(「制札」の通り多くの人が見やすいように「いろは書き」で、)

蝦夷言も其如く(平言)、端々のもの迄も聞得ルよふに

(アイヌ語もそのように(日常語で)、端々の人までも分かるように、)

通弁肝要と御心得可被成候。

(通訳することとお心得くださいませ。)

是は光年広瀬何某より伝授。②

¹⁰ 『イロハ蝦夷言』記載のものについては、翻刻が秋葉 (1989: 229)、現代語訳が別海町郷土資料館 (2003: 14-15) に収録されているため、これらを参考に筆者(深澤)が編集した。

(これは先年、広瀬何某から伝授されました。)

【中略】

九月廿七日

宮内喜太右衛門

米屋 伝蔵様¹¹

(『イロハ蝦夷言』16丁表 - 17丁表；下線部は筆者)

『蛮貊邦人言』記載のものは下線部①と②の部分異なるため、次も参照してほしい。

①乍併、唯口先而已ニてハ、三度が三度に言葉違ひまゝ有し故、

(しかしながら、ただ口先のみでは三度が三度言葉が違う状態であるので、)

世人のあざけるをもちひり見ず、

(世間の人々が嘲るのも恥じらわず、)

任我気ニ之ヲ書記申候。

(自らに任せる気持ちでこれを書き記し申すのです。)

扱、此内ニいろ／＼の申渡の真似などを加ひし候得とも

(さて、このうちに色々な申渡の真似などを加えましたが)

(『蛮貊邦人言』5丁表、裏)

②是は先年宮内何某大先生より伝授しとなん。

(これは先年、宮内何某大先生から伝授されたと言う。)

(『蛮貊邦人言』5丁裏)

①がこのように書き換えられているのは、『蛮貊邦人言』の場合、直後にアイヌ語の文章が40丁以上にわたって記載されているからである。つまり、このテキストは『蛮貊邦人言』本編の導入部として使用されているのであって、『イロハ蝦夷言』のものとは多少なりとも機能が異なるのである。

さて、この書簡の大まかな内容をまとめると次のようになる。

1. 天地、草木、魚虫の名はところによって方言差があること。
2. 言葉に男女差があること。
3. 上原熊次郎の『藻汐草』¹²にも誤りが時々見られること。
4. 申渡は特に重要なので、日本語・アイヌ語ともに平言(日常語)で誰にでもわかるよう

¹¹ 米屋の屋号については、別海町郷土資料館(2003)で次のように説明されている。「米屋というのは米屋孫兵衛のことで、寛政年中から釧路・白糠の両場所を請け負っていた請負人である。文政年間に入り、二年、四年、六年、八年と釧路場所を請け負い、文政五年、天保年間には更に漁場を開いていった」(p. 13)。

¹² 『藻汐草』は最古の日本語・アイヌ語辞典である。本報告書掲載の「加賀家文書における表記の特徴と傾向」で詳しく述べる。

に書き、また通訳すること。

『イロハ蝦夷言』の②に見られる広瀬何某というのは、広瀬三右衛門のこのようで、彼と宮内喜太右衛門は、能登屋円吉の『蝦夷記』に名前が見つかる。この二人は上原熊次郎を筆頭に、その時代に活躍していた通辞であって、伝蔵から見れば先輩通辞にあたると思われる。『蛮貊邦人言』の著者が伝蔵であるという確証はないが、少なくとも広瀬三右衛門→宮内喜太右衛門→加賀伝蔵と伝承されてきたということまでは言えるだろう。

この心得には幾分通辞としてのプライドのようなものが滲み出ていると筆者は考えている。モンベツ場所の円吉は番人であり通辞ではなかったけれども、彼も同じく著書である『蝦夷記』の中でオショロやシャコタンの通辞批判をしている¹³。彼らのプライドというのは、アイヌ語の正確さを期することから始まっているはずである。とはいえ、批判する側のほうがアイヌ語に長けていたかというのは（仮にそれが的を射た批判であったとしても）、我々はそこだけを切り取って見ることしかできていないのであり、とどのつまり誰もわからない。浅井亨は、加賀家文書のアイヌ語解説を試みた言語学者の一人であるが、『北海道大百科事典下巻』の「通辞 つうじ」という見出しには、それによる氏の見解が盛り込まれている。

著名な通辞として文化年間に松前奉行所にいた上原熊次郎や山田久右衛門などがいるが語学力には疑問がある。むしろ能登屋円吉や根室会所で土地改良も手がけていた加賀屋伝蔵などの方が評価できそうである。

（『北海道大百科事典下巻』1981：115）

佐々木（1989 [2013]）も「浅井氏のこの指摘は重要である」と述べ、同様に伝蔵のアイヌ語に評価を下している。しかし、広瀬と宮内も含めて、ここで名前が挙げられているような通辞たちの「語学力」はそう簡単に比較できるようなものではなく、この点について筆者は判断しかねている。高木は風に妬まれる。ひとつ確実に言えるのは、上原熊次郎は通辞のなかでも別格で、他の腕利きの通辞たちも彼を無視できなかったということだ。伝蔵が自らの言葉で熊次郎を批判したものを筆者はまだ見ないが、彼もまた『藻汐草』を写した者の一人である（資料番号49）。先行研究があるのと無いのとでは話が違ふのであり、たとえ伝蔵の評価が高まろうとも、熊次郎が非凡な人であったということは変わらない。

3. 加賀家文書の方言的位置づけ

アイヌ語の方言が、樺太、北千島、北海道の3つの方言に大別されるというのは、概ね一般的な理解として定着しているようである。また、北海道では南西と北東で方言差があ

¹³ 坂田（2003）、佐々木（1989 [2013]）によって取り上げられている。

るといふこともよく知られている。しかし、アイヌ語の方言区分に関しては未だ不明な点も多く、様々な議論がなされているのも事実である。本稿では、アイヌ語の方言区分に関して論じようとはしないが、加賀家文書がアイヌ語の方言研究に与える可能性とその位置づけについてごく簡単に紹介する。

アイヌ語の方言研究は、1955年から56年にかけて行われた服部四郎と知里真志保をはじめとする大規模な調査が始まりで、質的にも量的にも優れた資料として現在も活用されている。服部と知里は、田村すず子などの協力者と分担して各地を巡り、スワデッシュの基礎語彙をもとに19の方言¹⁴を調査した。そのデータによって、服部・知里(1960)のアイヌ語基礎語彙に関する統計学的研究が発表され、さらに1964年には、服部が編者となって『アイヌ語方言辞典』が編纂された。この辞典に収録された方言は、19方言から10方言¹⁵に絞られ、そのうち「千島方言」のデータとして鳥居(1903)の『千島アイヌ』を引用している。

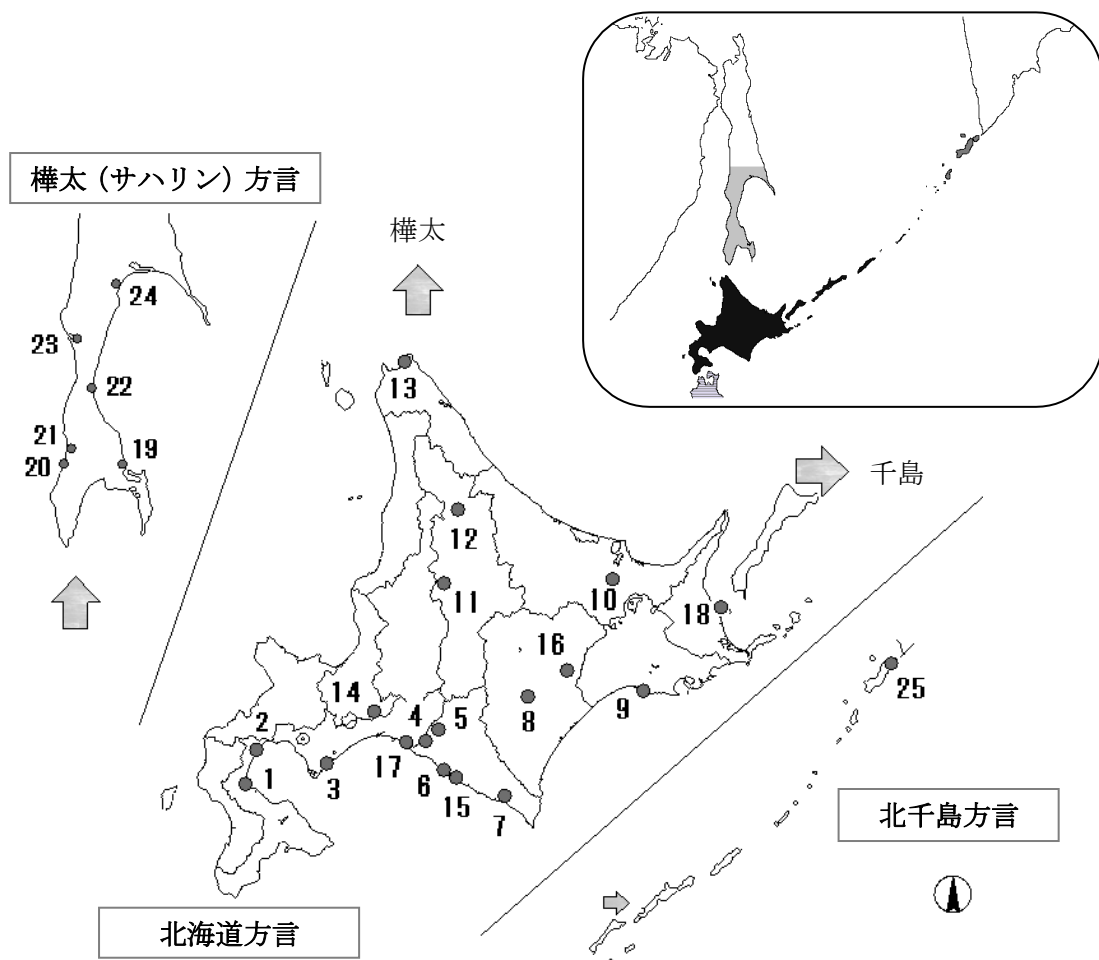
浅井(1974)は、服部・知里(1960)をベースにして、アイヌ語諸方言のクラスター分析を行った。浅井は、個人的に数人のインフォーマントから語彙を得ており、北海道の千歳方言を1地点加えたほか、旭川と帯広、釧路の3方言に関するデータも自ら修正しているようで、服部・知里(1960)のデータを補完するものとして貴重な資料である。そのほか、必要に応じて、知里真志保の『分類アイヌ語辞典』の植物編と人間編を参照し、北千島方言についてはありったけの資料を集めて分析の対象としている。

北千島方言に関しては、鳥居(1903)に加えて、村山(1971)の文献学的な研究が代表的である。村山(1971)には、S. P. クラッシュェニンニコフ、G. W. シュテレル、B. ディボフスキらの語彙集や鳥居(1903)をアルファベット順に並べたものが収録されている。日本語の文献ではないものについては和訳が付けられ、資料の詳細についても丁寧に記述されていることから、利便性の高い一冊である。前述の浅井(1974)の研究においても、鳥居(1903)と村山(1971)が参照されている。また、浅井(1974)は同論文でA. L. ピナールの語彙集を翻刻し、これもまた北千島方言として分析の対象としている。しかしながら、浅井自身も述べているように、ピナールのインフォーマントであったP. ウイアイがアイヌ語の非母語話者であったというから、間違いが多く含まれているということも考慮せざるを得ない扱いの難しい資料である。

中川(1996)は、服部・知里(1960)と服部(編)(1964)、さらに自身の千歳方言のデータをもとに、アイヌ語の言語地理学的な研究を行ったものである。そこで挙げられている6つのタイプ分けをもとに、筆者もまたアイヌ語の言語地理学的な研究を進めてきた(Fukazawa 2012, 2013)。図2は、筆者が言語地理学的な研究をする際に基本としている25地点である。

¹⁴ 図2の地図番号では、北海道(1-13)、樺太(19-24)にあたる。

¹⁵ 図2の地図番号では、北海道(1, 3, 4, 8, 10-13)、樺太(23)、北千島(25)にあたる。



- 北海道** : 1. 八雲、 2. 長万部、 3. 幌別、 4. 平取 (福満)、 5. 貫気別、 6. 新冠、 7. 様似、 8. 帯広、 9. 釧路、 10. 美幌、 11. 旭川、 12. 名寄、 13. 宗谷、 14. 千歳、 15. 静内、 16. 本別、 17. 鶴川、 18. 根室 (野付)
- 樺太** : 19. 落帆、 20. タラントマリ、 21. 真岡、 22. 白浦、 23. ライチシカ、 24. 内路
- 北千島** : 25. シュムシュ

図2 : アイヌ語の方言 25 地点

北海道方言のうち 14 番から 18 番については、次の資料を基に語形を特定している : 14. 『アイヌ語千歳方言辞典』、15. 『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』、16. 『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集』、17. 片山音声資料¹⁶、18. 加賀家文書。また、必要に応じて『分類アイヌ語辞典』や『北海道あいぬ方言語彙集成』、『アイヌ語釧路方言語彙集』、『旭川アイヌ語辞典』などの辞典・語彙集類や、北海道教育委員会が 1982 年から毎年発行している『アイヌ民俗

¹⁶ 故・片山龍峯氏が、1996-2002 年、鶴川町 (現むかわ町) の新井田セイノ氏および吉村冬子氏に対してアイヌ語の聞き取り調査を行った際に録音した原資料 (テープ 66 本) を指す。この音声資料は、中川裕教授を代表とする科学研究費補助金基盤研究 (B) 「アイヌ語鶴川方言の音声資料による記述的研究」 (2011.4-2014.3) にて整理され、一般に公開予定となっている。

文化財調査報告書』等のデータを参考にしている。特に服部・知里 (1960) に記載のない語彙については、25 地点全ての情報を取得するのが困難であるため、必ずしも 25 地点の語形が揃うとは限らない。

例えば、次の例は服部・知里 (1960) には収録されていない「朝」という語彙の分布図 (17 地点) である。

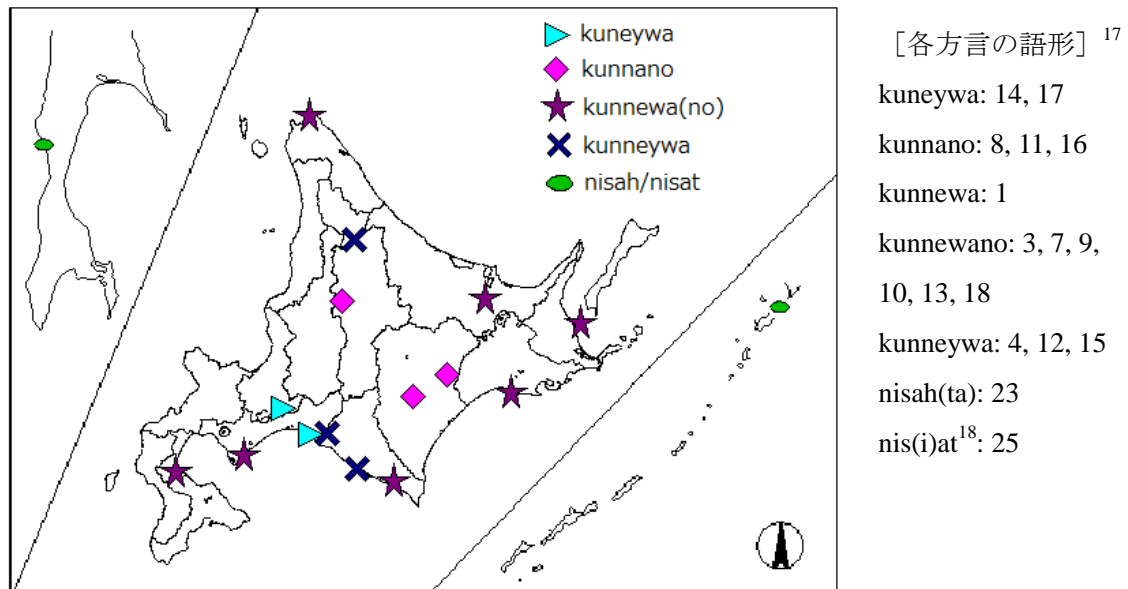


図3 : 「朝」

樺太と千島については明らかに情報量が不足していることから¹⁹、ひとまず北海道だけに焦点を絞って見てみることにする。まず、北海道の周縁部には *kunnewa(no)* (★) という語形が確認できる。言語地理学では、このような分布を「ABA 分布」などと呼び、A という語形のあとに B という語形が広がったことによって、A の語形が追いやられるように周縁部に残ったと考える。これは、柳田国男 (1930 [1980]) によって提唱された「方言圏論」という考え方を踏襲したものである。つまり、周縁にある語形 (A) が古く、中央にある語形

¹⁷ 引用文献と対応する方言番号は以下の通り :

服部 (1964)/ 1, 3, 4, 8, 10-13, 23 ; 北海道教育庁社会教育部文化課 (編) (1985)/ 7 ; 釧路アイヌ語の会 (2004)/ 9 ; 中川 (1995)/ 14 ; 奥田 (1999)/ 15 ; 澤井 (2006)/ 16 ; 片山音声資料 (1996-2002)/ 17 ; 加賀家文書 (「学校往来夷解書」等) / 18 ; 村山(1971)/ 25。

¹⁸ 村山(1971) にて参考にした資料および語形は以下の通り :

nisiät 早朝 (クラッシュェニンニコフ (1738) 「ラテン・クリル語彙」)
nÿssat 朝やけ (シュテレル (クラブロート) (1823) 「アジア・ポリグロッタ」)
nisat 朝 (ディボフスキ(1879-1883) 「シムシム島アイヌ語小辞典」)。

¹⁹ 樺太や北千島の *nisah* や *nis(i)at* は、*kunnewa(no)* 系よりも古い可能性がある。北海道でも *nisat* は「早朝」や「夜明け前」という意味で用いられており、*kunnewa(no)* というのは時間を細分化して表現するために後からつくられた語形かもしれない。

(B) がそれよりも新しいと考えるならば、*kunnewa(no)* (★) が「朝」の古形であるとひとまず疑うことになるわけである。

もちろん、地理上の分布だけでは証拠が足りないわけで、そのあとは後ろ盾となる個別の分析と証明が必要となる。*kunnewa(no)* は、*kunne* が「暗い、暗くなる」という意味の 1 項動詞で、*wa(no)* は「から」という格助詞に由来すると考えられる。アイヌ語は 1 項動詞が自由に名詞としても使用できる言語であるため、*kunne* は「夜」という意味でも使用されることがある。さらに、少し細かい話になるが、*wa(no)* という格助詞は、その所属先である名詞句が《場所》を表すものでなければならないという性質がある。この格助詞は、基本的に「普通名詞」には直接後続できず、後続させる場合は何等かの方法で《場所》を表す名詞句にしなければならない。一方、時間を表す名詞(句)というのは元々が《場所》を表す名詞(句)からの派生であることも多く、《場所》を表すことができる傾向にある。つまり、*kunne* もそれらと同じく直接 *wa(no)* を後続させることができるというのは不可能な話ではない²⁰。まとめると、この *kunnewa(no)* は、*kunne-wa(no)* で「夜から」という語構成になっており、これが意味的派生を遂げて、「夜から」→(夜の後)→「朝」というように使用されるようになったと推測できる。

さて、仮に *kunnewa(no)* (★) が最も古いということになれば、平取や静内、名寄に見られる *kunneywa* (×) は、それよりも新しいということになる。万が一、*kunneywa* (×) のほうが古いということ証明しようとするなら、なぜ、美幌・釧路・根室(東)、八雲・幌別(西)、様似(南)、宗谷(北)で同じように *y* が脱落し、*kunnewa(no)* (★) という同一の語形が成立したのかということの説明しなければならない。柴田(1969)の『言語地理学の方法』によれば、「こういう相互に独立の発生は、まったくありえないことではないけれども、確率的にはきわめて稀なこととしなければならない」とあり、またこのように B という語形が東西南北で A という語形に囲まれるような地理的分布を見せる時、A が B より「新しい確率はますます小さくなる」と述べている。これを立証するのは極めて難しいと言わざるを得ない。分析的な解釈として、例えば『アイヌ語沙流方言辞典』では *kunneywa* (×) が *kunne-i-wa* 「暗い・時・から」と分解されているが、これもやはり *kunnewa(no)* (★) より古いという根拠にはならない。もし上述の筆者の考察が正しければ、*i* 「(～になる／する)時」という形式名詞は文法的には必要がないものである。そうすると、*i* は「時間」を表すという意味の類推で過分に挿入されたものか、あるいは、単なる音の問題で、*kunne* と *wa(no)* の間に一種のわたり音として *y* が挿入されたと考えることになるだろう。そして何よりも分布図を素直に解釈するなら、*kunnewa(no)* (★) のほうが古いと考えるのが適当である。

²⁰ 類例としては、「明日」という意味の *nisatta* という語形が上げられる。これは、『アイヌ語沙流方言辞典』で *nisat-ta* 「夜明け前の空の白み・において」と解されているが、やはり *ta* は《場所》を表す名詞句に所属する格助詞で、通常「普通名詞」には直接後続できない。ただし、*nisat* は「夜明け」(『千歳方言辞典』)を表す時間の表現でもあって、語構成上 *nisat-ta* は *kunne-wa(no)* と非常によく似ていることになる。*nisat* については、注 19 を参照のこと。

鶴川や千歳に見られる *kuneywa* (△) は、語形から明らかに *kunneywa* (×) の縮約形であり、語形の分布から見ても間違いなさそうである。また、十勝の帯広と本別、および旭川には *kunnano* (◇) という語形があるが、これも *kuneywa* (△) と同様、もはや分析的に解釈するのが困難な語の形となっており、*kunnewano* (★) から別系統で派生した縮約形と考えるのが適当と見られる。これらをまとめると図4のようになる。

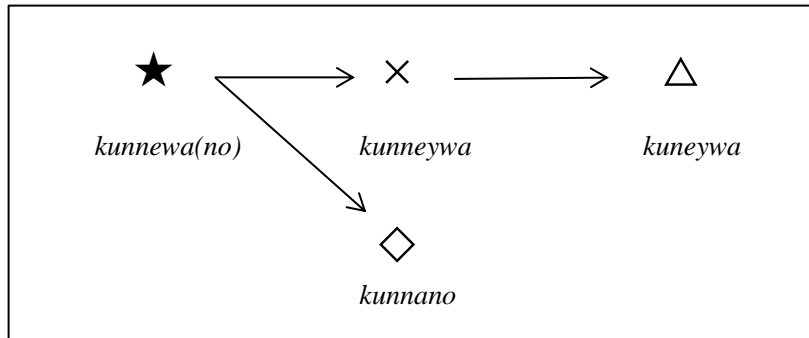


図4：「朝」の語形に関する史的変遷

2節で確認した通り、伝蔵は一所で勤務していたわけではない。釧路場所から東に向かって根室場所へと勤務地を移し、さらに野付、標津へと太平洋岸を北上していった。伝蔵が最初に覚えたアイヌ語は釧路方言であったと思われるが、根室や野付、標津等でアイヌ人と接するなかでその周辺の方言語彙が増えていったということは考えられる。図3を見てもらえればわかるように、加賀家文書に含まれる語彙は美幌や釧路の方言と類似することが多い。特に美幌の語彙に類似することは浅井(1972)が早くに指摘しているが、伝蔵が野付や標津に長くいたことを考えると然程不思議ではない。また、北海道の周縁部に位置する宗谷や八雲などと同じ語形を持つということも珍しくなく、地域的に千島列島に最も近い方言であるという点でも重要となってくる資料である。

加賀家文書が、どこの方言を採録しているか、どこの方言と言えるのか、ということはこれまでも何度か論じられてきた。池上(1969)は、「いくつかの地方の方言は絶滅した。根室の方言もその一例である。しかし少なくとも三代にわたってその地でアイヌ語を使った和人加賀家には十八、九世紀にかけてのアイヌ語記録が保存されており、その記録にはその地方の方言がおそらく反映しているであろう」と述べ、佐藤(2012: 205-206)もこの池上の見解に同意を示している。佐藤は、豊原他(1996)によって翻刻が紹介された伊藤初太郎(1883-1976)の著作『根室蝦夷の博物語遺集(ママ)』(私家版)を「確実に「根室方言」であると断定できる資料」と述べ、それを前提とした上で、

1. 伊藤の著作に見られる「レタンケップ」と加賀家文書の申渡の中に見られる「レタシケブ 作物」はどちらも *retaskep* という形式に相当し、一致関係にあること
2. さらに、*retaskep* は美幌方言(服部 1964)や塘路方言(知里 1976: 136)という根室周

辺の道東方言にも報告のある形式であること

これら2点を根拠に、「やはり加賀家文書の少なくともあるものが根室地方の方言を含むという予測を裏付けるものと言えるであろう」と述べている。

根室地方のアイヌ語を紹介したものとしては、豊原他(1996)のほかに、佐藤正彦・本田克代(1998)、そしてやや地域性に不明な点はあるが、大沼他(2004)も存在する。さらに、木村謙次(1798-1799)『蝦夷日記』には別海の乙名ホロヤ²¹に求めて得たとされる語彙が記載されているし、一昨年、東(2012)において紹介された金沢家文書²²が根室場所のアイヌ語解明の有力な手掛かりになりそうだとすることもわかっている。このような資料と比較しつつ厳密に検討していく必要はもちろんあるだろうが、問題は「根室方言」がどこの地域を指しているかということでもある。わざわざ言う必要もないけれども、現在の根室市だけを指すなら、加賀家文書が「根室方言」を含むとは言い難い。それよりも、伝蔵は野付や標津に長く勤務していたのであり、現在の別海町や標津町のあたりの語形を含んでいる可能性が非常に高いわけである。

そこで筆者は「根室方言」を、根室国、つまり現在の根室振興局管内(伝蔵の勤務地である標津町、別海町、根室市などを含む)道内地域の方言として広く指すことにし、加賀家文書のアイヌ語もこの「根室方言」と便宜上呼んでおくことにする²³。そうするのは、加賀家文書のアイヌ語が明らかに1方言と区分できるからという積極的な理由では勿論ない。この方言がどの方言と似た特徴を持ち、どの方言として分類されるか(あるいは、分類されないか)、ということがすぐさま解決できない問題であるからこそ、便宜的に釧路や美幌の方言などと区別しておこうとするもので、あくまで作業的な理由にすぎない。このようにしておく利点として例を挙げるなら、北海道立アイヌ民族文化研究センター発行「アイヌ民族文化研究センターだより」(第11号、1999)掲載の佐藤の考察にある。佐藤は、加賀家文書資料中の「御親料 根室花咲根室郡惣土人江」と題された文書について分析し、次の2点に着目している。

1. 第一音節が長く発音されたことを示すバアセ pase 「重い」のような形があり、アクセントの存在を窺わせるが²⁴、服部・知里(1960)で釧路方言にはアクセントの対立がない

²¹ クナシリ・メナシの戦いの時に和人側についたアイヌとして『夷酋列像』に描かれた12人のうちの1人。「ポロヤ」とも言われる。加賀家文書でも度々名前が挙がる人で、ノツカマフ(現ノッカマップ)から別海に移住してきたということが記されている。

²² 岩手県宮古市編纂事業により収集された資料郡の一つ。金沢家は幕末期に肝入を勤めた家であり、東(2012)はこの文書について「金沢三右衛門、金沢久蔵といった金沢家関係者の蝦夷地警備派遣、もしくは子モロ場所における勤務実態による、宮古金沢家への関係史料の伝来・伝存にあると考えられる」と指摘する。

²³ 根室場所に限ると年代によって標津の扱いが異なってくるため、ひとまず「国」という括りでとらえておく。また、南千島については一端保留にしておく。

²⁴ 括弧付きで「(母音の長短の対立の可能性はしばらく置く)」とある。

と報告があること

2. また、同文書に「アヌカラ」が二例あり、a-nukar（我々が／一般に人が、見る）に相当するものであろうが、春採、美幌、網走のような他の道東地方の資料では a- ではなく an- という形式を用いること

そして、これらの点について佐藤は「いずれも沙流方言のような北海道南西方言と共通の特徴を示しているようにも見える。根室方言がもしそのような特徴を持っていたとすれば、他の道東方言と共通の特徴を持っていたらという一般的予測に反することになり、東西両アイヌ語方言の違いがどのようにしてできたか、というアイヌ語学上の大問題の行方にも大きく影響を与える可能性がある（もしそうでないとすれば、今度は加賀家文書全体の性格を考え直す必要が出てくるだろう）」と結んでいる。

このような提言はとても魅惑的であるが、佐藤自身も述べているように「文書全体の分析を待たねば確実なことは言えない」ため、まだ慎重に調査すべき段階であることも事実である。筆者も加賀家文書全体の分析には到底至っておらず、本稿でこれについて深く議論するつもりもないのだが、要するに、アイヌ語の方言的な特徴を相対的に見ていくためにも、加賀家文書のアイヌ語を「根室方言」と呼び分けておくべきというのが、現時点における筆者の姿勢ということになる。

5. アイヌ語からみた資料成立時期の特定

「学校往来夷解書上」とは、正徳4年(1714)成立の堀流水軒「寺子(教訓)往来」をアイヌ語訳したものである。加賀家文書のなかには和文筆写本(資料番号38)も残されている。本テキストの写しは現時点で5件(資料番号26, 34, 35, 40, 371)あることが知られており、加賀家文書内の写本数で言えばトップレベルである。表1からこの5件のみを再掲する。

No.	資料名	資料番号	作成者	年代：西暦	数量	計測値(cm)	写真枚数
2	[和文・アイヌ語解]	26	伝蔵	(安政元年～：1854-)	1冊	24.8 ×17.8	36
7	御通行蝦夷語	34	伝蔵	?	1冊	24.5 ×16.6	18
8	[シベツ名主宅蔵申口]	35	伝蔵	?	1冊	24.5 ×17	17
11	学校往来夷解書上	40	伝蔵	(万延元年～：1860-)	1冊	14.5 ×19.5	13
15	[学校往来夷解書上]	371	伝蔵	?	1冊	29 ×18.5	10

表1': 加賀家文書のアイヌ語資料に関する書誌情報 (抜粋)

この中で鍵となるのが、『学校往来夷解書上』（資料番号 40）である。これは、宛名書きが明確に残されている唯一の資料で、伝蔵が息子の常蔵に送った正文（あるいはその写し）と推定される。送り手に「大通辞伝蔵」という署名が残されていることから、40 番はこの称号が与えられた標津場所時代、つまり、1860 年以降のもということで間違いなさそうである。

34、35 番は、年代が特定できていない資料とされてきたが、これらの表紙表には「ノツケ伝蔵」という署名が残されていることから、1860 年以前の野付通行屋時代のものであるという解釈が可能である。ただし、35 番には 1861 年のものと考えられる資料の写しも含まれており、注意を要する。後から綴じられたものかもしれない。また、興味深いことに、26 番は「(安政元年～：1854-)」と考えられてきた資料だが、余白に書入れの多い資料で、35 番のアイヌ語から推敲されたような形跡が見られる。371 番は、26 番の書入れを本文に清書したもののようで、尚且つ 40 番よりも良質な訳出となっていることから、40 番よりも新しい可能性がある。

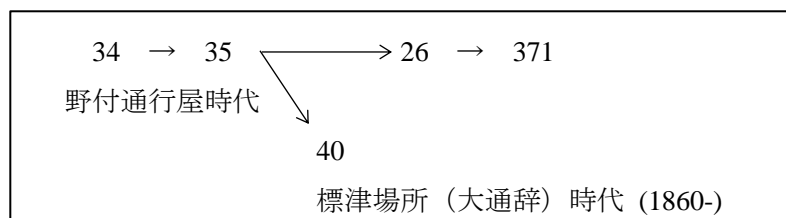


図 5：「学校往来夷解書上」のテキスト変遷²⁵

それでは、図 5 の変遷を検証すべく、実際に具体例を見てみよう。(1), (2)... や大文字の A, B, C の項目は原文和訳、小文字の a, b, c... の項目にあるカナは原文のアイヌ語、括弧内の数字は資料番号を示す。ローマ字表記および鍵括弧内（「」）の現代語訳は筆者による。初出のものに限りグロスを付した。

(1) 木石畜類に異ならず

A. 木石畜類に

a. ニイ シユマ エ子ケマウシベ (35, 40, 26, 371)²⁶

ni suma ine-kema-us-pe

木 石 4 の.ADN-脚-生える.INTR-もの (=四肢動物)

「木石や四肢動物」

²⁵ 番号は、「資料番号」を示す。

²⁶ 34 番は A の部分が欠如しており、B の句から始まる。

B. 異ならず

- a. ヲヤヅ ソモ子ナ (34, 35, 40)

oya-p *somo* *ne* *na*
 他の.ADN-もの NEG COP DSC
 「は他の物ではないぞ」

- b. ~~ヲヤヅ~~ シヨモ子ナ 【字消し】 (26)

oyap somo ne na
 「は他の物ではないぞ」 (= a)

子ハッコノ アンルエ子 【書入れ】
ne *nekkono* *an* *ruwe* *ne*
 COP のように 3:ある.INTR.SG の だ(.COP)
 「であるようなのだ」

- c. 子ハッコノ アンルエ子 (371)

ne nekkono an ruwe ne
 「であるようなのだ」 (= b 書入れ)

(1) は、「無筆之輩は盲者之名を得、木石畜類に異ならず」という和文後半部のアイヌ語訳である。(1B) は「(無筆の輩は) 木石や畜類のようなものだ」という意味のアイヌ語にすべきなのだが、(1Ba) は「木石や畜類が他の物 [それとは異なる物] ではない」という意味になってしまっている。主語は「木石や畜類」ではなく、「無筆の輩」でなければならない。26 番の段階でその誤りに気づき、修正したものと考えられる。ちなみに、(1Bb, 1Bc) で使用される *nekkono an* 「に似ている」は、『アイヌ語方言辞典』を調べると美幌にしか見つからない。帯広では *nepkon an*、沙流、名寄、宗谷で *nenno an*、樺太 (ライチシカ) で *neeno an* となる。

(2) 手跡

- a. テキ ヲカケ (34, 35, 40)

tek-e *okake*
 3:手-POSS 後.LOCR
 「手の後」

- b. ~~テキヲカケ~~ ~~イキクシテ~~ ~~テ~~ ~~テケ~~ 【字消し】 (26)
tek-e okake / iki kuske / te / tek-e
 3:手-POSS 後.LOCR / する.INTR 向こう側.LOCR / ERROR? / 3:手-POSS
 「手の後」 / 「する向こう側」 / (書き誤り?) / 「手」

ノイカト 【書入れ】

- nuye katu*
 3:書く.TR 3:様子.POSS
 「(それ) の書き振り」

- c. ノイカト (371)
nuye katu
 「(それ) の書き振り」 (= b 書入れ)

(2) は、「徒に光陰を送り手跡執行、油断せしめ」という箇所「手跡」のアイヌ語訳である。もちろん「手跡」は、(2a)に見られるような「手の後」ではなく、(2c)の「書き振り」のような意味であって、(2b)の時点で正確な解釈に辿り着いたものと考えられる。

(1) と (2) はどちらも 371 番に近づくに従って、原文の意味を正確に捉えなおすことで、アイヌ語訳の質が高まっていく例であったが、次の (3A) は、371 番がより適切なアイヌ語訳であるとは限らない例である。

(3) 早天朝起手水遣ひ

A. 早天

- a. トナシ ニソロ (34, 35)
tunas nis-or
 早い.ADN 空-ところ.LOCR
 「早い天」

- b. トナシ ニソロタ (40)
tunas nis-or ta
 早い.ADN 空-ところ.LOCR LOC
 「早い天で」

- c. トナシ ニシヨロ 【本文】 (26)
tunas nisor
 「早い天」 (= a)

トエマ ニシヤツ【余白】
tuyma nisat
 遠い.ADN 明け方
 「早天（早朝）」

d. トナシ ニシヤツ (371)
tunas nisat
 早い.ADN 明け方
 「早い明け方」

(3A) の「早天」は、「早朝」や「明け方」の意味であるので、(3Aa-c) の「早い天」というのは漢字を逐語訳したことによる誤りである。アイヌ語の用例として実際に確認できるのは、(3Ac) の余白に書き入れてある「トエマ ニシヤツ (*tuyma nisat*)」である。これは久保寺 (1992) の『アイヌ語・日本語辞典稿』において、

tuima nisat “遠い朝—黎明, ほのぼのと薄明るく明ける朝 = *kunne nisat* / *peken nisat* の反意語” (p. 279)

とあるので、意味も原文の日本語に合致する。これに対し、(3Ad) の「トナシ ニシヤツ (*tunas nisat*)」は 371 番のアイヌ語であるが、また「早い」という漢字に引っ張られてしまっているように見える。この表現が果たして 26 番の「トエマ ニシヤツ (*tuyma nisat*)」より良質なものであるかどうかは疑問である。

B. 朝起

a. クン子ワ ホブニ (34)
kunnewa hopuni
 朝に.ADV 3:起きる.INTR
 「朝に起き」

b. クン子ワノ ホブニ (35, 40, 26, 371)
kunnewano hopuni
 朝に.ADV 3:起きる.INTR
 「朝に起き」

(3Ba, 3Bb) はとても微妙な例で、「クン子ワ (*kunnewa*)」でも「クン子ワノ (*kunnewano*)」でも文法的には問題がなかったのではないかと思われる。例えば『アイヌ語沙流方言辞典』

では、*kunneywa* が名詞、*kunneywano* が副詞として扱われており、前者は名詞の性質をもっているが副詞的にも働くことが記されている。同辞典では、このような接尾辞の *-no* について「副詞/副詞句についてその部分をはっきりさせる。一種の強調」(p. 431) と説明されている。方言は違うが、*kunnewa* も *kunnewano* もどちらも副詞として働くと考えられる。35 番以降から接尾辞の *-no* を用いた後者の形を採用した理由は明白ではないが、こちらが適当として改めたのだろう。尚、この「朝」という語形の方言差については 4 節で述べた通りである。

C. 手水遣ひ

- a. テキ ワッカ ユワンケ 【本文】 (35)
tek-wakka eywanke
 手水 3:使う.TR
 「手水を使い」

ナヌフライ 【当て字】

- nan-u huraye*
 3:顔-POSS 3:洗う.TR
 「顔を洗い」

- b. ナヌフライ 【本文】 (34)
nanu huraye
 「顔を洗い」 (= a 当て字)

テキ ワッカ ユワンケ 【当て字】

- tek-wakka eywanke*
 「手水を使い」 (= a 本文)

- c. ナヌフライ 【本文】 (40)
nanu huraye
 「顔を洗い」 (= a 当て字、b 本文)

テキワカ ユワンケ 【当て字】

- tek-wakka eywanke*
 「手水を使い」 (= a 本文、b 当て字)

- d. テキ ナヌ フライ【本文】 (26)
tek-e *nan-u* *huraye*
 3:手-POSS 3:顔-POSS 3:洗う.TR
 「手が顔を洗い」

テキ ワッカ ユワンケ【当て字】
tek-wakka eywanke
 「手水を使い」 (= a 本文、b, c 当て字)

- e. ナヌフライ (371)
nanu huraye
 「顔を洗い」 (= a 当て字、b, c 本文)

(3Ca-e) は、5つの資料の全てが異なる表記法になっている例で、「手水遣ひ」という和文をアイヌ語訳したものである。「手水」とは手や顔などを洗う水のこと、「テキ ワッカ (*tek-wakka*)」などは、それをアイヌ語に直訳したもののようである²⁷。当て字に使用する表現の切り替えなどを通して、「手水を使い」から、「(手が) 顔を洗い」という意識へと変化していく過程が見えると思うが、35番が「手水～」のほうを本文にとり、34番が「顔を～」を本文にしているところで、若干の資料の新旧に矛盾が生じているように見える。

34番のほうが35番より前に書かれたという証拠としては、先ほど見た (3B) に加えて次のような例がある。

(4) 兄弟子

- a. ユボ アキボ ウタレ (34)
yupo *ak(i)po*²⁸ *utar*
 兄さん 弟 たち.PL
 「兄さんや弟たち」

- b. キアン子 クル ワノ (35, 40, 371)
kianne-kur *wano*
 上である.ADN-人 ABL
 「(学年の) 上の人から」

²⁷ ただし、*tek(e) wakka eywanke* 「手が水を使う」というつもりでアイヌ語訳した可能性があるため、確実に「手水」を表したアイヌ語とは言い難い部分もある。

²⁸ 鳥居 (1903) に「*akibo* 弟」と見つかる (出典は村山 (1971: 329))。また、知里 (1975) では、*akpo* が胆振や日高の西半で「弟」を表す雅語として記録されている。

- c. キアン子 クルワノ 【本文】 (26)

kianne-kur wano

「(学年の) 上の人から」 (= b)

ユボ アキボ ウタレ 【当て字】

yupo ak(i)po utar

「兄さんや弟たち」 (= a)

(4) は、「兄弟子之差図を用ひず」のなかの「兄弟子」の訳語である。34 番は、その漢字のまま「兄さんや弟たち」というアイヌ語になっているが、35 番は「(学年の) 上の人」という訳を当てて「兄弟子」を表している。(4b) の「キアン子 (*kianne*)」は、年齢のほかに身分が上である人をも表すことができる語であって、より好ましい表現になっていると言える。もともと書入れの多い資料である 26 番は、当て字として再び (4a) の表現を用いているが、本文は変わらず (4b) のままである。もしかすると、26 番 (= 4c) は、34 番 (= 4a) と 35 番 (= 4b) の両方を参照しているのかもしれない。

それでは最後に図 5 を立証すべく、35 番を起点に 26 番と 40 番が枝分かれし、26 番の系統を引き継いで 371 番ができたという証拠になりうる例を見てみることにする。

(5) 人十字写さバ

A. 人

- a. シシヤモ (34)

sisam

和人

「和人」

- b. モシマ シシヤモ (35)

mosma sisam

別の.ADN 和人

「他の和人」

- c. モシマ ウタレ (40)

mosma utar

他の.ADN 人々.PL

「他の人々」

- d. モシマ シシヤモ 【本文】 (26)

mosma sisam

「他の和人」 (= b)

ヲヤクル 【余白】

oya-kur

他の.ADN -人

「他の人」

- e. ヲヤクル (371)

oya-kur

「他の人」 (= d 余白)

B. 十字写さバ

- a. ワンカンビ ノエワ子ツキ

wan kampi nuye wa ne ciki

10の.ADN 字 3:書く.TR CONJ COP COND

「10字書けば」

(5) は、「人十字写さバ、己百字を学」という前半部分のアイヌ語訳である。(5Aa-e) のアイヌ語の表現に特別不自然なものはないが、文の意味からすると (5Aa) は不適當かもしれない。また、10字書いたのは一人であってもよいのだから、(5Ac) よりは (5Ab, 5Ad, 5Ae) のアイヌ語のほうが適當であるし、「和人」に限らないとすれば (5Ad, 5Ae) の「ヲヤクル (*oya-kur*)」が最も好ましい訳語であると言える。(5Aa-e) の語形を図5に合わせると以下のようになる。

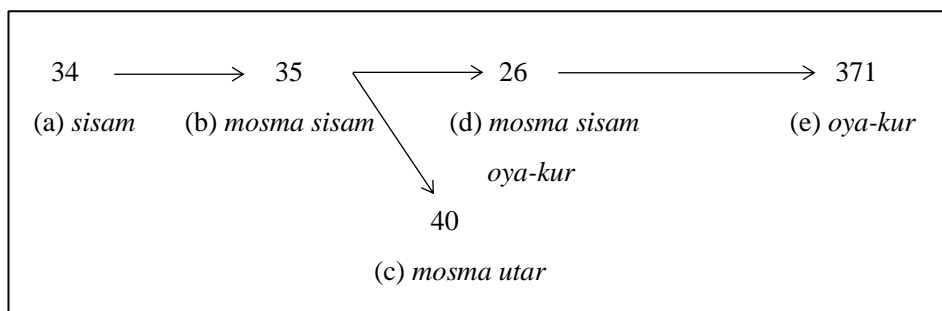


図5': 「学校往来夷解書上」のテキスト変遷

このようにアイヌ語の比較を通して資料の新旧が判断できるということは、加賀家文書の

アイヌ語資料全てに言えるわけではない。しかしながら、各資料の成立年代を推定する手がかりのひとつにはなりそうだとわかってきている。徐々に適格なアイヌ語訳へと移り変わっていく様子からも伝蔵の勤勉さというのは想像に難くはなく、それがこうした判断材料へと導く契機になっているのは非常に興味深い。標津場所で「大通辞」という称号をもらう晩年においても、恐らくアイヌ語に対する拘りは薄れておらず、そういうことと言えば、彼のアイヌ語が野付だけではなく晩年に過ごした標津のアイヌ語に影響を受けている可能性も十分に考えられるだろう。野付以北の標津までもを視野に入れた上で、近隣の美幌方言との語彙的な類似を検討していく必要はありそうである。

(付記) 本稿は、千葉大学大学院人文社会科学研究所における全体研究会(2013年3月5日)にて「加賀家文書」のアイヌ語資料とその研究史」という題で報告した内容を下敷きに大幅な加筆・修正を行ったものである。

略号

-	形態素境界	ERROR	書き誤り
3	三人称	INTR	自動詞
ABL	奪格	LOC	位置格
ADN	連体詞／自動詞の連体的用法	LOCR	位置名詞(《場所》化)
ADV	副詞	NEG	否定
COND	条件	PL	複数
CONJ	接続助詞	POSS	所属形
COP	コピュラ	SG	単数
DSC	談話標識	TR	他動詞

参考・引用文献²⁹

- 秋葉実(編)(1989)『北方史資料集成』2. 北海道出版企画センター.
- 浅井亨(1972)「加賀屋文書の中のチャコルベ」『北方文化研究』6. pp. 131-162. 北海道大学.
- 東俊佑(2012)「岩手県宮古市所在・金沢家文書の蝦夷地関係史料について」『北海道・東北史研究』8. pp. 75-87. 北海道・東北史研究会.
- 池上二良(1969)「言語:アイヌ語の輪郭」『アイヌ民族誌』アイヌ文化対策保存協議会(編). 第一法規出版.
- 大沼忠春・川上淳・佐々木寿雄・本田克代(2004)「長尾又六氏の業績(3)」『根室市博物館開設準備室紀要』18. 同準備室.

²⁹ 1節で紹介した加賀家文書のアイヌ語に関する先行研究、並びに加賀家文書の資料については割愛した。

- 川上淳 (1991) 「『加賀家文書』からみたネモロ場所」『根室市博物館開設準備室紀要』5. 同準備室.
- 坂田美奈子 (2003) 「『番人円吉蝦夷記』に含まれるいくつかの論点について」『itahcara』2. pp. 19-25. 同編集事務局.
- 佐々木利和 (1989) 「蝦夷通詞について」『民族接触：北の視点から』. pp. 48-60. 北方言語・文化研究会 (編). 六興出版. ((2013) 『アイヌ史の時代へ：余瀝抄』. pp. 223-241. 北海道大学出版会所収のものを使用.)
- 佐藤知己 (1999) 「加賀家文書」について. 北海道立アイヌ民族文化研究センター (編). 「アイヌ民族文化研究センターだより」11. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- (2012) 「池上二良先生のアイヌ語研究」『北方人文研究』5. 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
- 佐藤正彦・本田克代 (1988) 「根室地方で採録されたアイヌ語一文久二年」『根室市博物館開設準備室紀要』12. 同準備室.
- 柴田武 (1969) 『言語地理学の方法』筑摩書房.
- 豊原熙司・川上淳・本田克代 (1996) 根室地方で採録されたアイヌ語—明治時代以後. 『根室市博物館開設準備室紀要』10. pp. 91-110. 同準備室.
- 中川裕 (1996) 「言語地理学によるアイヌ語の史的研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2. pp. 1-17. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 服部四郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24/4. pp. 371-406. 日本文化人類学会.
- 深澤多市 (1931) 「アイヌ文献及遺物を観るの記」. 『蝦夷往来』. p. 35. 代田茂樹 (編). 尚古堂. ((1972) 『蝦夷往来』復刻版. 北海道出版企画センター.)
- 別海町教育委員会 (編) (1989) 『加賀家文書』別海町教育委員会.
- 別海町郷土資料館 (2001a) 『別海町郷土資料館附属施設 加賀家文書館展示解説』別海町郷土資料館.
- (2001b, 2002-5) 『加賀家文書 現代語訳版』1-5. 別海町郷土資料館.
- (2012) 『別海町郷土資料館所蔵資料目録第1集 加賀家文書等資料目録I』別海町郷土資料館.
- 柳田国男 (1930) 『蝸牛考』刀江書院. ((1980) 『蝸牛考』岩波書店.)
- 山崎栄作 (編) (1986) 木村謙次集上・下巻『蝦夷日記』(木村謙次 (1798-1799) 『蝦夷日記』木村和義氏所蔵写本を底本とした翻刻本.) 自費出版.
- Asai, Tooru (1974) Classification of dialects: Cluster analysis of Ainu dialects. *bulletin of the institute for the study of north Eurasian cultures* 8: 45-136. Sapporo: Hokkaido University.
- Fukazawa, Mika (2012) The distribution and Interpretation of words for parents — 'mother' and 'father' in Ainu dialects. *Papers from the first international conference on Asian geolinguistics*. 89-98. Tokyo: Aoyama Gakuin University. (<http://agsj.jimdo.com/picag-1/>)

———— (2013) The distribution of interrogative or indefinite roots in Ainu: hem & ne. *Papers from the first annual meeting of the Asian geolinguistic society of Japan*. 12-21. Tokyo: Aoyama Gakuin University. (<http://agsj.jimdo.com/pagsj-1/>)

辞典・語彙集等

- 太田満 (2005) 『旭川アイヌ語辞典』 アイヌ語研究所.
- 奥田統己 (1999) 『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集 (CD-ROM つき)』 札幌学院大学.
- 釧路アイヌ語の会 (2004) 『アイヌ語釧路方言語彙』 釧路アイヌ語の会.
- 久保寺逸彦 (編) (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿』 北海道文化財保護協会.
- 澤井春美 (2006) 『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集：本別町・沢井トメノのアイヌ語』 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館.
- 知里真志保 (1975) 『知里真志保著作集別巻Ⅱ：分類アイヌ語辞典人間編』 平凡社.
- (1976) 『知里真志保著作集別巻Ⅰ：分類アイヌ語辞典植物編・動物編』 平凡社.
- 鳥居龍蔵 (1903) 『千島アイヌ』 吉川弘文館. (村山七郎 (1971) 「鳥居龍蔵氏のシュムシュ島アイヌ語彙」 『北千島アイヌ語』, pp. 329-342. 吉川弘文館 から引用.)
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』 草風館.
- 服部四郎 (編) (1964) 『アイヌ語方言辞典』 岩波書店.
- 北海道教育庁社会教育部文化課 (編) (1982-1988) 『アイヌ民俗文化財調査報告書』 1-7. 北海道教育委員会.
- (編) (1989) 『アイヌ民俗文化財調査報告書』 8. 北海道文化財保護協会.
- 北海道教育庁生涯学習部文化課 (編) (1990-1999) 『アイヌ民俗文化財調査報告書』 9-18. 北海道教育委員会.
- 北海道新聞社 (1981) 『北海道大百科事典』 下巻. 北海道新聞社.
- 村山七郎 (1971) 『北千島アイヌ語』 吉川弘文館.
- 吉田巖 (1989) 『北海道あいぬ方言語彙集成』 小学館.

(ふかざわ みか・千葉大学大学院人文社会科学研究所)